

恋重荷

世阿弥作

季は	地は	シテ	ワキ	前
雜	京都	ツレ	狂言	官人
		女御	下人	

シテ 山科莊司
ワキ 狂言下人
ツレ 女御

前 前に同じ
後

シテ 山科莊司
ワキ 官人
ツレ 狂言下人

前 前に同じ
後

シテ 莊司の靈
ワキ 下人
ツレ 女御

前 前に同じ
後

「そもそも是は白河の院に仕へ奉る臣下なり。さて
も我君菊を御寵愛有つて。毎年あまたの菊を植ゑ
そだてられ候。又こゝに山科の莊司とて賤しき者
の候。いつも菊の下葉を取らせられ候ふ間。申し
つけばやと存じ候。又承り候へば。彼者いかなる
をりにか。忝くも女御の御姿を拝み申し。勿体な
くも恋と為りたる由承り候ふ間。彼者を召し出だ
し尋ねばやと存じ候。いかに誰かある。

狂言
「御前に候。」

ワキ
「山科の莊司に此方へ来れと申し候へ。」

狂言
「畏つて候。いかに山科の莊司の渡り候ふか。
シテ詞
「誰にて渡り候ふぞ。」

狂言
「いそぎ御参りあれとの御事にて候。」

シテ
「畏つて候。」

ワキ
「いかに莊司。何とて此間は御庭をば清めぬぞ。」

シテ
「さん候此程所勞仕り候ひて。さて怠り申して候。」

ワキ 「尤にて候。さて汝は恋をするといふは誠か。

シテ 「さやうの事をば何とて知しめられて候ふぞ。

ワキ 「いやくはや色にいでのあるぞとよ。さる間此事を忝くも女御きこしめし及ばれ。急ぎ此荷を持ちて御庭を百度千度まはるならば。其間に御姿を拝ませ給ふべきとの御事なり。なんぼう有難き御詫にてはなきか。

シテ 「何と此事をきこしめし及ばれ。其荷を持ちて御庭

を百度千度まはれとかや。百度千度とは。百度も千度も持ちてめぐらば。其間に御姿を拝まれさせ給ふべきと候ふや。

ワキ 「げによく心得て有るぞ。なんぼう有難き御事にてはなきか。

シテ 「さらば其荷を御見せ候へ。

ワキ 「此方へ來り候へ。是こそ恋の重荷よ。なんぼう美しき荷にてはなきか。

シテ 「げにく 美しき荷にて候。たとひ叶はぬ業なりとも。

も。仰せならばさこそあるべけれ。ましてやは是は

賤しき業。さのみは隔てじ名を聞くも。

地 「重荷なりとも逢ふまでの。く。恋の持夫に為らうよ。

シテ 「誰踏みそめて恋の路。

地 「ちまたに人の迷ふらん。

シテ 「名もことわりや恋の重荷。

地 「げに持ちかねる此身かな。

シテサシ 「夫れ及びがたきは高き山。思ひの深きはわたづみの如し。

地 「いづれ以てたやすからんや。げに心さへ軽き身の。

塵の浮世にながらへて。よしなく物を思ふかな。

ロング地 「思ひや少し慰むと。露のかごとを夕顔の。黄昏時
も早過ぎぬ。恋の重荷を持つやらん。

シテ 「重くとも。思ひは捨てじ唐国の。虎と思へば石に

だに。立つ矢の有るぞかし。いかにも軽く持たうよ。

地 「持つや荷前の運ぶなる。心ぞ君が為めを知る。重くとも心そへて。持てやく下人。

シテ 「よしとても。此身は軽し徒らに。恋の奴に為りはてゝ。亡き世なりと憂からじ。

地 「なき世に為すもよしなやな。げには命ぞ唯頼め。

シテ 「しめぢが腹立ちや。

地 「よしなき恋を菅筵。伏して見れども寝らればこそ。苦しや独寝の。我手枕の肩替へて。持てども持たれぬ。そも恋は何の重荷ぞ。

シテ 「あはれてふ。言だに無くは何をさて。恋の乱れの。束緒も絶えはてぬ。

地 「よしや恋ひ死なん。報はゞそれぞ人心。乱恋にして。思ひ知らせ申さん。(申入)

「何と莊司が空しくなりたると申すか。言語道断近

頃ふびんなる事にて候ふぞや。総じて恋と申す事は。高き賤しき隔てぬ事にて候へどもさりながら。彼者の恋の心を止むとの御方便にて。重荷を作つて上を綾羅錦繡を以て美しく包みて。いかにも軽げに見せて持たせなば。彼者思はんには。かほど軽げなる荷なれども。恋の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得。恋の心や止まるべきとの御事にて候ふ処に。賤しき者のかなしさは。是を持ち御庭を

めぐらば。御姿をまみえさせ給はん事を悦び。勢力を尽し候へども。もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み。嘆きてかやうに身を失ひ候ふ事。かへすぐもふびんにこそ候へ。此由を申し上げうずるにて候。いかに申し上げ候。山科の莊司重荷を持ちかねて。御庭にて空しく為りて候。かやうの賤しき者の一念は恐ろしく候。何か苦しう候ふべき。そと御出であつて。彼者の姿を一目御覧ぜら

れ候へ。

ツレ「恋よ恋。我中空に為すな恋。恋には人の死なぬものかは。無慙の者の心やな。

ワキ詞「是はあまりに忝き御詫にて候。はやく立たせおはしませ。

ツレ「いや立たんとすれば磐石に押されて。更に立つべきやうもなし。

地「報いは常の世の習ひ。

後ジテ「吉野川岩切り通し行く水の。音には立てじ恋ひ死にし。一念無量の鬼となるも。唯よしなやな誠なき。言縁妻の空だのめ。

地「げにもよしなき心かな。

シテ「浮寐のみ。三世の契の満ちてこそ。石の上にも座すといふに。我はよしなや逢ひがたき。巖の重荷持たるゝものか。あら恨めしや葛の葉の。玉だすき。畝傍の山の山守も。

地 「さのみ重荷は持たればこそ。

シテ 「重荷といふも思ひなり。

地 「浅間の煙あさましの身や。衆合地獄の重き苦しみ。

さて懲り給へや懲り給へ。

地 「思ひの煙立ち別れ。いなばの山風吹き乱れ。恋路の闇に迷ふとも。跡弔はゞ其恨みは。霜か雪か霰か。終には跡も消えぬべし。是までぞ姫小松の。葉守の神となりて。千代の陰を守らんや。千代の陰をも守らん。